

体験博物館 千葉県立房総のむら館報

「房総のむら」は、参加体験型の博物館です。原始・古代から近・現代までの衣・食・住・技の移り変わりを、当時の環境の中で、直接体験することができます。

開館時間 9:00～16:30
休館日 月曜日（祝日の場合は開館し、翌日休館）
年末年始（2022年12月27日～2023年1月2日）
臨時休館日 2022年5月10日・6月7日
2023年1月5・6日・2月7日
入場料 一般300(240)円 高大学生150(120)円
※中学生以下と65歳以上無料。
※障害者手帳をお持ちの方と介護者1名無料。
()内は20名以上の団体料金

瓦 版

大木戸

Kawaraban OKIDO

Vol.68

2022年（令和4年）3月31日

編集・発行
千葉県立房総のむら指定管理者
公益財団法人千葉県教育振興財団房総のむら
〒270-1506 千葉県印旛郡栄町龍角寺1028
TEL.0476-95-3333
<http://www2.chiba-muse.or.jp/MURA/>

令和三年度屋外展示

「千葉の民俗芸能」を終えて

令和三年十月二日（土）から十一月二十三日（火・祝）までの四十五日間、屋外展示「千葉の民俗芸能」を開催しました。例年、展示会は風土記の丘資料館で開催していますが、昨年の農家を中心とした屋外展示に引き続き、今年は商家町並みの小間物の店を主会場として展示を行いました。近年、外国の方の来館が多くなってきていることもあり、昨年度の「千葉のまつり」と併せて、多くの方に千葉の文化を広く知っていただく機会となる予定でした。「千葉の民俗芸能」では、県内に多くある民俗芸能の中から、囃子・獅子舞・神楽に焦点を当て、展示と実演で紹介しようと考えていました。しかし新型コロナウイルスの影響で、予定されていた県内各地の多くの民俗芸能が中止となってしまいました。それだけでなく、多くの民俗芸能団体の活動自体ができない状況が続いていました。このような状況の中、千葉市の「登戸の神楽囃子」を継承している「登渡神社登戸囃子連」、東金市の「北之幸谷の獅子舞」を継承している「北之幸谷獅子連」、市原市の「鶴峯八幡の神楽」を継承している「鶴峯八幡宮十二座神楽保存会」の皆様にご協力いただき、芸能で使用している装束や用具を展示することができました。また上演の映像や囃子を録音したのも借りることができた

ので、総屋では記録映像を、主会場一階では「囃子」を流すことにしました。このことにより、民俗芸能の動きや音なども感じていただけたかと思えます。また、会期前の九月三十日に緊急事態宣言が解除され、感染状況も落ち着いていたこともあり、十一月十四日（日）に「登戸の神楽囃子」を上演することができました。

「鶴峯八幡の神楽」は毎年十月の第三日曜日（鶴峯八幡宮で行われる秋季例大祭で奉納される神楽です。十二の演目で構成され、約五時間かけて奉納されます。今回は、その演目の中から「湯立の舞」と「八幡様の舞」を上演いただきました。



「鶴峯八幡の神楽」
10月31日の上演の様子

会場：小間物の店・総屋
会期：令和3年10月2日（土）～
令和3年11月23日（火・祝）

「登戸の神楽囃子」は登渡神社の例祭などで奉納される囃子や神楽です。大胴（大太鼓）一人、付け（締太鼓）二人、笛一人、鉦一人の五人で構成されています。「大囃子（屋台・切囃子）・昇殿・鎌倉・四丁目・大囃子」の五曲の組曲からなる「五囃子」をはじめとした囃子や神楽を上演いただきました。



「登戸の神楽囃子」
11月14日の上演の様子

今回上演が叶わなかった「北之幸谷の獅子舞」ですが、毎年二月、十月、十一月に北之幸谷地区内の稲荷神社を中心に奉納されます。十月の秋祭には長さ十メートルの梯子を登りながら舞う「梯子のぼり」が演じられます。

祭りや民俗芸能は祭日など定期的の実施によって継承が成り立っていることが多くあります。準備や練習、担当者の入れ替わり等一連の流れが継承につながっていきます。新型コロナウイルスが流行し始めてから約二年が経ち、その間、祭りは中止または神事のみで縮小され、民俗芸能はほとんどが中止となりました。今回の展示に伴う調査の際にも、現在休止して、その後も活動を続けられるかわからないという民俗芸能の団体もありました。今後はこのような変化の様子も捉えながらも、開館以来続いている県内の民俗芸能の上演を引き続き行い、より多くの方にその伝承の姿を伝えることができると考えています。

(商家グループ 高原)



北之幸谷の獅子舞
(北之幸谷獅子連提供)

農家

「どんど焼き」

房総のむらでは、毎年正月の十五日前後に「どんど焼き」という演目を行っています。

「どんど焼き」とは、各家庭で正月に飾った注連縄や松飾りなどを持ち寄り燃やします。また、その火は神聖視され、特別な力が宿っているとされています。

注連縄や松飾り等を燃やした際に出た灰で餅を焼いて食べるのですが、それはなぜでしょうか。

そこで今回は、「どんど焼き」とは何か、人々がどのような願いを込めて行っていたのか、この二点に焦点を当てて紹介します。

元は宮中行事ですが、江戸時代後期の『北越雪譜』に描かれていることから、江戸時代には、一般民衆の中でも年中行事の一つでした。



燃えさかる櫓

正月十五日前後を小正月と呼ぶ地域が多く、門松や注連縄を燃やす火祭りが小正月の日に全国各地で見られます。これがいわゆる「どんど焼き」ですが、千葉県内でもその呼称は様々です。「どんど焼き」の他に、富津市・東金市などの「ドンドンピ・ドンドッピ」、安房郡三芳村山名(現南房総市山名)などの「大火焚き」、市原市菊間などの「お飾り焚き」、銚子市名洗などの「上り正月」などが挙げられます。それぞれ、規模、手順、燃やすものが少しずつ異なります。また、燃やした際に出た灰を家の周りに撒くと火難除けになるという風習は東金市、富津市、市原市の事例では存在しますが、無病息災・家内安全、「この一年が病気なく元気で過ごせるように」と祈る思いはどこも一様に同じです。また、餅を焼く風習は、「焼いて食べると風邪をひかない」と伝えられています。

房総のむらでも無病息災の願いを込めて毎年実施しています。来年度の「どんど焼き」にぜひ参加してみたいかがでしょうか。

(農家グループ 鈴木)



餅を焼いている様子

商家 川魚の店

「なまず料理」

なまずと聞くと、ぬるぬるとしたイメージや地震を思い浮かべる方が多いと思います。

なまずと地震を結び付けて広く世に伝えられたのは、江戸時代の鹿島神宮の神人だったといわれています。安政の大地震(一八五五年)が起こった際には、現在「鯰絵」と呼ばれる摺物も流行しました。



なまず

料理としては、愛知県や埼玉県で有名な蒲焼、なますが最古の材料だったともいわれる蒲鉾などが挙げられますが、なます料理には汁物もあることはご存知でしょうか。

令和四年二月五日（土）、六日（日）の二日間、房総のむらの川魚の店では、なますを食することができる体験、「なます料理」を行いました。年に二日間のみ実施するこの体験では、印旛沼や利根川流域などに伝わる「ひっこがし汁」や「なますのフライ」を食べることができます。

「ひっこがし汁」は、まず活なますを丸ごと鍋で煮ます。つねるなますを鍋に入れ、静まるまで鍋蓋で押さえる調理法は、なかなか衝撃的な印象を受けました。よく煮えたら頭を持ってぶら下げるようにし、胴の肉を箸ではさんでこき落とします。このことを「ひっこがし」といいます。



煮たなますをひっこがす様子

骨がとれたらアクをとり、大根やねぎなどの野菜を入れ、味噌で味をつけて完成です。寒さが堪える季節だけに、一口、また一口とすすむことに染みる温かさは格別でした。



完成したひっこがし汁

「なますのフライ」は、七輪の火で揚げました。温度調整が難しい中、カリカリに仕上がったフライは、とても好評でした。なますと聞いて恐る恐る食された来館者の方もいらつしゃいましたが、食べてみたら美味しかったという声を多くいただきました。

本演目は、来年度にも実施予定です。ご興味を持たれた方は、ぜひご参加ください。なますの印象が変わるかもしれません。

(商家グループ 箕輪)



風土記の丘資料館 「岩屋古墳の立体模型と 動画製作」

動画製作

風土記の丘資料館は、令和二年九月から建物の大規模改修工事を行っていました。今年一月末に工事が終わりました。築五十年を経て、様々な所が痛んでいた様子を覚えている方は、壁や床がピカピカになった資料館を見て、ほっとするのではないのでしょうか？

二月からは、建物内部に置く展示台・展示ケースなどの修復や模型などの展示物の製作に入りました。そのひとつに、龍角寺古墳群を代表する岩屋古墳の立体模型と動画の製作があります。

模型の基になる三次元データの計測と空中写真撮影を昨年末に行いました。岩屋古墳全体の形状と動画の画像は、ドローンを使って撮影しました。

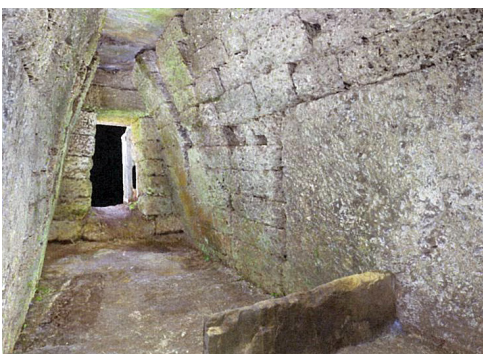


岩屋古墳全体像の3次元モデル

岩屋古墳は、東西七十八メートル、南北七十六メートルの墳丘をもつ古墳で、七世紀では日本最大の方墳です。実際に近寄ってみると、大きすぎて全体像が見えないので、つい登ってみたいくなるのですが、国の史跡として形が崩れないように守る必要があります。また、高さ十三メートルを超える墳丘に登るのは体力的に難しい方もいらっしゃると思います。

そこで、資料館内に岩屋古墳の全体像が一目で分かる立体模型を展示することになりました。模型は、実寸の百分の一の大きさで作ります。墳丘の南側には二つの石室があります。東側の石室は内部が崩れて密閉されています。西側の石室も地震の影響などで石積みの一部が傾いて危険な状態にあります。動画では、西石室の内部の様子を詳しく紹介します。

(風土記グループ 白井)



岩屋古墳石室3次元モデル(石室奥から)

広報・普及グループ 「伝統文化入門」

『いけばな入門』

令和四年一月十五日（土）に伝統文化入門を実施しました。今年度、実施予定の全四回のうち、今回は三回目となります。毎回、異なる内容を実施しておりますが、今回は深山真純氏を講師としてお招きし、「いけばな入門」を実施しました。

主な内容は「池坊いけばな」の歴史の解説やいけばな方の説明といけばなの体験です。「池坊いけばな」には、立花、生花、自由花の三つのスタイルがありますが、今回は、戦後の自由思想の中から生まれてきた約束事を持たない自由花のスタイルで体験を実施しました。



体験の様子

花材には、スイートピー（黄・紫・白）、カスミソウ、ニューサイランの三種類に加え、ガーベラまたはバラを選択し、全四種類を使用しました。同じ花材を使用しても、体験者によって、まったく印象が異なる作品になり、それぞれの個性が生かされた「いけばな」が完成しました。完成した後は、講師による手直しを行い、最後にそれぞれが記念撮影を行いました。体験者の大半は、初心者ということもあり、最初は緊張する様子が見られましたが、体験を進めていくうちに、だんだんと慣れてきて、楽しんで体験していただくことができました。

今回の体験では、完成した作品を体験者同士で鑑賞することもでき、「いけばな」に触れる貴重な機会となりました。内容は異なる場合もありますが、伝統文化入門は来年度も実施する予定です。機会がありましたら、ぜひご参加ください。

（広報・普及グループ 高橋）



完成した「いけばな」

調査報告

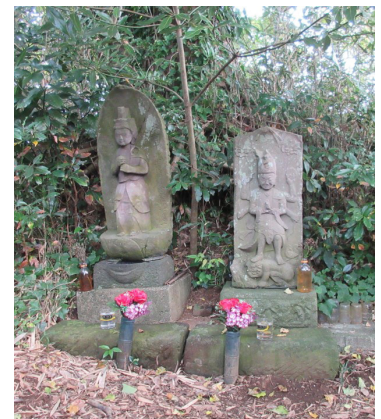
「龍角寺地区のタブー」 〜タブーから見えるもの〜

その場所は、栄町龍角寺と酒直両地区の境界となる辻の一角（写真① 下側の敷）にあります。敷はボサと呼ばれ、触るとバチが当たる（病気や死に至る）といい、今でも恐れられています。写真②はボサの中にある二基の石塔です。さわれない土地で石塔の入口と石の周囲は整備されています。酒直に引越してこられた方が清掃されているとのこと。石塔は、左が天和三年（一六八三）の大日如来を彫った十九夜待龍角寺女人講の石碑、右は文政十二年（一八二九）の青面金剛の庚申塔です。このボサの対面に「北向きの道祖神」と呼ばれる森があります。

至木挽坂



写真①



写真②

周辺には次のような伝承（伝説）があります。（一）両村にやってきた母と赤子が世話をされず行き倒れになった話。（二）両村が一つのムラであった頃、白馬に乗った名主が突然落命し、そのたどった道が境となった話。（三）印旛沼から台地上がる木挽坂は難所であり、ボサは息絶えた馬の埋葬地らしい話などです。

母子の死は大日如来の石碑（十九夜待の女人講）との関連がうかがえます。タブーのエリアからは、両地区が同じムラであったこと、さらにその禁忌は新住民には及ばないこと。道祖神の「北向き」はこのボサを指すのではないか、など。伝承だけで本質には迫りませんが、このタブーから「忘れ去られた土地の記憶」が垣間見えるようです。

（広報・普及グループ 地引）



「オダチに関する調査（一）」

千葉県・茨城県の利根川沿いや手賀沼・印旛沼周辺では、夏祭に木製の大きな太刀を担いだり、縄で引きながら集落を回り、地域の安全や五穀豊穡、疫病退散などを祈願する「オダ（夕）チ」という行事が、広く分布しています。これらの地域では、別名「雨降山（あふりやま）」と呼ばれ農耕神として信仰されている大山詣りが盛んでした。このため、「オダチ」は大山阿夫利神社（石尊様）の願い事を書いた木太刀を納める「納め太刀」の影響を受けていると考えられます。現在、この行事が行われているのは、栄町木塚地区や印西市古新田など一部の地域だけとなっています。調査の中で、木塚と栄町酒直地区の方から、「山に赤いのはススキに椿よ、咲いて絡まる藤の花」という不思議な唄を聞きました。唄の意味は分かりませんが、行事のとらえ方を考える上でも興味深いものです。今後、事例を積み重ねる中で手がかりが掴めたらと思います。



駒形神社の太太刀に刻まれている「石」の文字



栄町布鎌中谷地区のオダチ

栄町安食にある駒形神社には、大中小三本の木太刀が奉納されています。そのうち、大型の太刀には「文政九戌年」の文字が刻まれており、江戸時代から行事が続いていたことがわかります。

(商家グループ 宮内)

ご来館の際の注意事項

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、マスクの着用、手指の消毒、検温、入館確認票の記入にご協力いただいております。また、定員などを縮小して体験を実施しており、早めに受付が終了する場合がございます。なお、混雑が予想される場合は、入場者の分散化や入場制限を行う場合がございますので、あらかじめご了承ください。

◇編集後記◇

新型コロナウイルスが流行し始めて二年が経ちましたが、依然として収束の兆しが見られない状況です。しかし、このような状況下でも、房総のむらでは安心してご見学いただけます。皆様のご来館をお待ちしております。

(商家グループ 高原)

令和4年度 上半期の主なイベント

- 春のまつり
5月3日（火・祝）～5日（木・祝）
- 伝統文化入門①
6月19日（日）
- 教員のための博物館利用研修会
7月29日（金）
- むらの縁日・夕涼み
8月6日（土）・7日（日）
- 伝統文化入門②
8月20日（土）
- 北総江戸巡り
9月19日（月・祝）

※上記以外に多くの実演・体験をご用意しております。詳細は令和4年度体験のしおり、または当館ホームページをご覧ください。
※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、予告なく中止・変更する場合がございます。